

「霧」の季節になりました。霞(かすみ)は春の季語ですが、平安時代以降、秋に発生するものを特に霧と呼ぶようになったそうです。気象学の上では、無数のごく小さな水滴が空気中に浮んで視界を^{さえぎ}り、水平方向に見える距離が1 km未満の現象を指します。ちなみに、1 km以上見えれば靄(もや)というそうです。

親鸞^{しんらんしょうにん}聖人が霧を煩惱^{たど}に喩えているように、秋の霧は注意が必要です。

霧が晴れなければ日照を^{さえぎ}り気温を下げるので、農作物などの管理や車の運転などにも注意しなければなりません。

また、登山などで高い山に登って雲海や川霧の風景を眺めているうちにはいいのですが、霧で湿った荷物は重くなり、靴底は滑り、体は寒さを感じ、更に道に迷いやすくなるので細心の注意が必要です。

道元^{どうげん}禅師が修行僧に説き示した教えを、弟子の懷^{えいしょう}辨禅師がまとめられた、『正法眼蔵随聞記(しょうぼうげんそうずいもんき)』のなかでは、古人^{こじん}が云っている。「霧の中を行けば、気がつかないうちに、衣^{ころも}がしめっている」と。よい人^{ひと}に近づけば、気がつかないうちによき人^{ひと}となる。と、人と人とのふれあいの大切さや、良き師匠との出会いの大切さ、そして正しい教えに出会うことの大切さを、霧^{もぢ}を用いてお示しになっておられます。

自然の中で、霧が晴れた時の空と空気の爽やかさ、さらに虹を見ることが出来たら嬉しくなります。また、天気の変わり目の鮮^{あざ}やかさと気持ちよさを感じる事が出来ます。

道元禅師が示されたように、良き人との出会いや正しい教えとの出会いは、知らず知らずのうちに、霧^{きり}が衣を湿らせるように私たちの心に染みわたり、霧が晴れた時のように、晴れやかな気持ちにさせてくれるのです。